

## 鹿沼市文化協会四〇年のあゆみ

文化協会副会長 小林 守

今年の七月で設立四〇周年を迎えることになりました。

この節目の時に、過去を振り返り、鹿沼市文化協会の現状と課題を考え、皆さんとともに市民文化活動の継承発展を期したいと思います。

なお、この「四〇年の歩み」作成に当たっては、

「かぬま文化年報」創刊号 昭和五二年七月三一日発行

「かぬま文化年報」第九号 昭和六一年四月三〇日発行

「かぬま文化年報」第十九号 平成八年七月二〇日発行

「かぬま文化年報」第二十九号 平成一八年七月一六日発行

の先輩諸氏の記事を参照いたしました。

### 設立のころ

今宮神社前に市民待望の社会教育施設・旧中央公民館（市立図書館併設）が昭和四四（一九六九年）開設オープンしました。初代館長は市役所で卓越した手腕を發揮してきた幹部の岡田幸夫氏でした。

そこを拠点として堰を切ったように文化活動団体や生涯学習グループが集まり、大きく育ちはじめました。

その後順次、市内各地区に地区公民館（現在のコミュニティセンター）が整備されていきますが、その中央センターの機能を持つ中央公民館のオープンは高度成長期にはいった鹿沼の市民にとっても画期的な出来事でした。

中央公民館や図書館を活動拠点にした日本児童文学者協会鹿沼支部「河鹿の会」の黒川常幸氏らは「鹿沼文化年報」発行の必要性を他の活動団体に呼びかけ、昭和四八年一二月から何回か会合を持ちました。そのときの呼びかけ、考え方については、その創刊号に記されています。

「鹿沼における文化活動も各サークル独自の、そして創意に満ちた運営で年々活発化しているが、サークル間の交流が少ないことや他サークルの現状把握が困難であることは否定できない。このことは、大げさに言えば、鹿沼の文化活動の拡大のための障害になっているともいえる。そこで、次のよ

うな意図のもとに、文化年報を編集し発行することとした。

- 1 各サークルの活動状況を年報の中に収録することによって、鹿沼の文化状況が把握できる。
- 2 この年報を読んでもらうことによって未参加の人々に文化活動に参加しようとする動機や選択の機会を与えることができる。それはサークル層を厚くすることにもつながって考えると考えられる。
- 3 年一回の刊行によって、ダイジェストされた（別の意味では、重要度の高い）ものが累積されて、貴重な記録として残っていく。
- 4 この刊行がある刺激となつて、サークルの活動が活発化する可能性を持っている。
- 5 さらに、この編集の作業過程を通してサークル間の意志の疎通が助成され、それが発展的に日常的な交流につながる芽を抱いている。

この年報は二号で終わっていますが、これが鹿沼市文化協会の設立のきっかけとなり、鹿沼市文化協会の「かぬま文化年報」創刊号につながって行くことになりました。

この間、県の文化協会の重鎮であった高内壮介氏から、「もっと広範な文化関係者の結集をはかりたい」旨の提言もあり、中央公民館を会場に、発起人会ができて、昭和五〇年一月に「鹿沼の文化状況と将来への展望」というテーマで参加の対象や活動などについて協議を重ね、鹿沼市文化協会の設立趣意書に集約されました。

「今日われわれが個人や団体によって享受継承し、そして発展創造し続けている文化については、立ち後れている鹿沼でも、それぞれの分野で地道ながら独自の取り組みがなされています。しかし、その現況をみると、文化活動における横の連携の薄さや広がりや弱さを否定することはできません。そこで地域ぐるみの文化のより一層の振興を考えると、鹿沼の文化に関心を寄せる市民の広い層を結集して市全体の文化環境を高める活動を興す必要を痛感し、この実現のために「鹿沼市文化協会」を設立しようとするものです。発起人に名を連ねた方々は次の通りでした。

愛波正雄 麻屋与志夫 入江正永 奥山文雄

川上茂雄 加藤 洋 黒川常幸 坂本 和  
曾我芳子 高内壮介 橋本美代子 林 功郎  
福島 充 福田 武 藤崎昇三 細谷貫一郎  
柳田芳男 六角見孝  
昭和五一年（一九七六年）七月一日、産業文化会館小ホールにおいて、県内一八番目になりますが、鹿沼市文化協会が設立されました。

鹿沼の各界を担ってきたそうそうたる方々が名を連ねています。（現在かなりの方々が故人となられてしまいました。）当時市の人口は八三〇〇〇人、会員は賛助会員を含め六三六六人。初代会長には、その後八期一六年間、会長職をつとめられた福島 充氏が選任されました。

設立後40年の変遷をたどりますと、  
初代会長 福島 充  
二代会長 愛波正雄（20周年会長）  
三代会長 阿部 勝  
四代会長 柳田芳男（30周年会長）  
五代会長 入江正永  
六代会長 山菅昭八（40周年会長）（現在）です。

### 活動の方向と拠点

昭和五一年七月に文化協会は設立されましたが、活動の内容や創る文化の方向付けについて、試行錯誤が続きます。それらを協議する、時宜を得た議論の場が設けられました。

「文化振興提言会」です。

昭和五二年四月、岡田幸夫館長の中央公民館に、五六名の関係者が集合しました。主テーマを「市民の文化交流をどう進めるか」とし、「各部門の振興をどうすすめるか」を分科会のテーマにして熱のこもった提言・議論が展開されました。当日の担当者や提言者は次の通りでした。

一 開会式 進行 柳田芳男常任理事  
開式のことば 奥山文雄副会長  
主催者挨拶 福島充 会長  
来賓祝辞 愛波泰蔵 顧問（文化財保護審議委員）

大貫西一 顧問（文化財保護審議委員）

閉式のことば 奥山文雄副会長

## 二 全体会

総括提言 高内壮介

提言 ① 安生貞子

② 小笠原忍

③ 相田シメ

④ 長谷川宗召

⑤ 岩本柏鳳

⑥ 腰山巖

⑦ 加藤久

⑧ 安野静治

⑨ 松本裕利

⑩ 阿部勝

山本喜重

文書提言

## 三 分科会

第一分科会（文芸部門）

司会者 加藤洋

記録者 神山義朗

第二分科会（書道・絵画・美術工芸部門）

司会者 坂本和

記録者 小林志津子

第三分科会（民謡・民舞・吟詠・音楽・

伝統芸能部門）

司会者 奥山文雄

記録者 湯沢典子

第四分科会（生活文化部門）

司会者 大橋松

記録者 岡田幸夫

（記録者は公民館・図書館職員）

四〇年たった今でも、大いに参考にしなければならぬ、諸先輩の鹿沼の文化継承と創造への熱意であろうと思われ、ます。提言会の内容のうちいくつかを取り上げておきます。

\* 愛波泰蔵氏 「文化関係の大同団結ができたことを喜、

び今後、鹿沼市文化協会が文化都市の推進力になるこ

とを望んでやまない。文化の発達は限られた一部門で

あつてはならない。総合的な発達が必要である。」

\* 大貫西一氏 「獅子舞は鹿沼に四か所あったが、現在は、一か所関白獅子舞だけが残っている。百四、五十年前から伝えられてきたものを九〇年ほど前、踊りを習いなおして現在の形に引き継がれてきた。三〇人の人員が必要なので後継者難で困っていたが、本年か若い人に引き継ぐことができることになった。一〇年くらいで滅びてしまいかと心配したが、さらに長く継承できそうである。

\* 高内壮介氏

総括提案「市民の文化交流をどう推進するか」

「栃木県は文化不毛の地だといわれるが、誰が言い始めたかわからない。栃木県人自らの卑下ではないのか。益子には文化勲章を受けた浜田庄司がおり、宇都宮からは棟方志功が尊敬する川上澄生が出ている。足利からは詩の三冠王（読売文学賞・高村光太郎賞・歷程賞）である岡崎清一郎がいる。岡崎清一郎は渡良瀬川、逸見猶吉は赤麻遊水池と切っても切れないつながりがある。故郷をぬきにして仕事はできない。

鹿沼の文化をどうしたらよいか。他地域の文化団体との交流を考えるより、まず鹿沼の文化協会の会員相互がお茶をのみながらでもいい、数多く会うことだと思う。そして地元を固めるべきだ。鹿沼にある民俗芸能でも、それを調べていけば、昔の人たちの悲しみや喜びを知ることができる。それは歴史の一面を知ることにもなる。まず、鹿沼という地盤の上をしっかり立つことだ。」

\* 腰山巖氏 図書館の独立について・・・

図書館は本の貸し出しをしていけば、それで用が足りるというものではない。文化のセンターとして、広範な内容をもつて市民に応える機能を持っていなければならぬ。そういう意味で独立した図書館の出現が期待される。

\* 阿部勝氏 産業文化会館のホール利用について・・・

民謡民舞の活動を通して考えることだが、現在、発表会などの使える大ホールは産文会館のみである。冷

房装置がないため夏場の利用は極端に減少する。市民の生活レベルが上がってきている現況から、産業文化会館のホール利用を高めるためにもなんとか改造することはできないか。市当局は予算がないといっているが、なんとかならないものだろうか。

**\* 小笠原忍氏 展覧会にふさわしい会場を・・・**

書道教育の裏方をさせてもらっている立場から、提言を試みたい。私が現在までタッチしてきける書道展は、芸術祭書道展、上都賀地区書初展、新春書初展などであるが、いずれの出品点数が年を追うごとに多くなってきている。

芸術祭の場合は、二〇数年前、商工会議所の裏にあった公民館が始まったが、当時は三百点ぐらいだった。それが去年は三千点に達して、産文会館で行ったが会場の都合で、とても全部飾れない。上都賀地区書初展も七千点も出品され、中央公民館を利用するが展示できるのは七分の一の千点である。それも狭いところに押し込めるといって感じで、鑑賞するにもゆとりがない。展覧会にふさわしい会場がどうしても必要なのである。

**\* 相田シメ氏 若い人たちの積極的な参加を・・・**

わたしは現在、俳句・くみひも・すみ絵・書道などの学習活動に参加しているが、どの集まりにも若い人たちの姿が少なくてさびしい。二〇代・三〇代の若い人たちに、ぜひ積極的に参加してほしいと希望する。

**\* 松本裕利氏 伝統芸能の伝承を・・・**

日吉ばやしは、現在二三人の技能伝承者を含めて五人ほどの協力者によって組織化ができ、自治会でも援助をしてくれている。練習も容易ではないし、太鼓などの道具も破れば自弁で修理しなければならぬ。華やかな舞台への誘いもあるが、それらなことわり、泥臭くてもいい、小さな社会の中で、人間関係を大切にしながらコツコツとやっていきたい。

できれば、鹿沼で伝統芸能を一堂に集めて公開する

機会などが催されたら幸いである。

\* 安野静治氏 わらべ歌の伝承を・・・

核家族化とテレビの影響で、わらべうたの存続が危ぶまれている。わらべ歌で遊べる子はごく限られた数になってしまった。わたしが取材した石裂の木挽歌も深津の田植え歌も今、収録しておかなければ永遠に失ってしまうだろう。昔からあったものをぜひ、残しつつづきたい。そして、親と子の、年寄りと幼な子との心のかけ橋にしたいものである。

\* 山本喜重氏 マンネリ化した芸術祭の運営や各グループだけの活動を脱却して分野別の集まりを持ったらどうか。リーダーの発掘育成に心がける必要がある。(文書による提言)

\* このほか芸術祭・茶華道展の見直し、相互交流(岩本柏鳳氏・長谷川宗召氏)や、健康づくりと文化(安生貞子氏) 手作りの福祉村への誘い(加藤久氏)文化協会員の相互交流参加などの提言があった。

分科会の議論を集約すると、おおよそ次の通りになる。

・・・(個別グループ活動から相互交流へ)

・・・(伝統文化継承の問題)

・・・(教育文化施設の充実)

これらの提言や議論がきっかけとなり、流れを作り、鹿沼市民文化祭の四部門方式が定型化され、相互交流と、自主的な役割分担が図られました。鹿沼市民文化祭は、鹿沼市・鹿沼市教育委員会の主催事業で文化協会は後援の立場ですが、その主催者・実行委員会の構成はほぼ文化協会が担っています。今年三八回を迎える文化祭ですが、そのマンネリ化を克服し、新たな展開を構想すべき時ですが、そのためにも設立当初の提言会のような真摯な熱意による議論が、行政と協会と市民の協働で進められるべきものと考えます。

会場や、拠点についての議論では、坂田山の開発事業の中に「鹿沼市民文化センター」が位置づけられ、一九八四年(昭和五九年)について本格的な文化の殿堂が完

成オープンしました。そして第六回市民文化祭が当所において盛大に開催されることになりました。

また、市立図書館の独立化も図られ、川上澄生美術館・商工会議所・文化活動交流館・市民情報センターなどともに睦町の文化ゾーンの一角に位置づけられ現在に至っています。

なお、この提言会の事務局は中央公民館・図書館が担っていました。岡田さんには陰になりながら、鹿沼市文化協会の礎をしっかりと担っていただいたといえます。

その後転勤などがあり、林功郎さんが会計・事務局長を担うことになり、事務局機能は公民館や教育委員会社会教育課や、生涯学習課に一時期変転しましたが、非常勤の事務担当者を行政が財政支援してくれる形に落ち着き、宇賀神勝明さん、そして斉藤雅代さんとなってきたわけです。その後事務局長は副会長兼務で森田春雄さん宇賀神勝明さんへと続いて来たところですが、事務局会計の斉藤さんの事情もあり、次年度からは、鹿沼市民文化センターを退職された外山拓也さんが、事務局（会計）を担うことになりました。一年間の猶予期間において、事務所は文化センターへ移転することになります。外山さんの今後の活躍が期待されています。

### 活動の拠点と今後の課題

最後に、鹿沼市文化協会設立四〇年節目の時に当たり、私的な思い出にも絡み恐縮ですが、いくつか提言しておきたいと思います。鹿沼に欠けている教育文化施設は大学及び博物館であるといえます。もちろん大学は今どき、望むべくもない社会経済状況でしょうが、たとえば放送大学のサテライト誘致や、大学機能を一部に持たせた「生涯学習大学・マイカレッジ」への改革が検討されるべきではないかと思えます。さらにこれはようやく現実の行政課題にもなってきましたが、「鹿沼まるごと博物館基本計画」の具体的推進です。鹿沼市文化財保護審議会や当文化協会（特に鹿沼史談会など）の宿願であり、鹿沼学舎や鹿沼自然観察会なども市行政に要望してきてきたもので、博物館法に基づく本格的な博物館です。コンセプトは鹿沼の財政状況や社会経済状況に鑑み創意工夫がとめられますが、既設の他市や他県の博物館等



とお付き合いができる機能を備えたものでなければなりません。平成二七年四月に、「鹿沼博物館基本計画」が、鹿沼市教育委員会から公表されました。この基本計画策定の市民会議の委員一五名中文化協会関係者は三名（高岡正之・小林守・鈴木貢）が参加しています。その責任もあり、今後とも行政・政治とも連携・協働しながら、その実現のために努めていきたいと考えています。